

「コリオレイナス」(シェイクスピア)

紀元前五世紀のローマ。窮乏して暴徒と化した民衆が、「食べ過ぎてゐる」貴族達に「こつちの言ひ價通り」の穀物の支給を要求すべく棍棒や武器を持つて集つてゐると、「民衆にとつては血も涙も無い」傲慢この上無しの將軍ケイアス・マーシヤスが現はれ、民衆を罵つて云ふ、「この謀反人のごろつきめ」ら、「一體、何が欲しいのだ」、「平和も嫌だ、戦争も厭だと喚き散らす手合ひの癖に？戦争となれば縮み上り、平和となるといい氣にふんぞり返る」、そんな「貴様達民衆の人氣を便りに右往左往」なんぞしてゐられるか。

だが、暴動の沈靜化を圖る貴族達は民衆と妥協して、その代辯者たる護民官を民衆自身に選ばせる。將來に禍根を残す弱腰の措置だとしてマーシヤスが怒つてゐると、ローマの宿敵ヴォルサイが兵を擧げたとの知らせが届く。しかも敵將オーフィディアスはマーシヤスの好敵手だったから、マーシヤスは勇み立ち、民衆に向つて、「勇敢なる謀反人諸君」、ヴォルサイには食物がどつさりあるぞ、「さあ、一緒に來い」と呼び掛けると、民衆は「こそこそ逃げ去」つて了ふ。

マーシャスはローマ軍の副將として敵の都コリオライを攻め、血塗れになりながらも敵將を一騎打ちの死闘の末に逃走させ、「コリオレイナス」なる稱號を與へられ、ローマに凱旋後、執政官に推舉される。しかし執政官になる爲には「謙遜の意を表す」檻褸ぼろを纏まとつて民衆の前に立ち、戦傷の跡を公示し、民衆の承認を請はねばならない。誇り高いコリオレイナスには耐へられない。けれども、母や友人に説得され、嘲弄を混へつつ濫々民衆の承認を請ひ、愚かな民衆を一旦は騙し果おほせるが、護民官は嘲弄を見破り、民衆を唆そゝして承認を取り消させる。コリオレイナスは激怒して民衆と護民官を激しく罵り、叛逆罪で告發され、追放刑を宣告されると、ヴォルサイに走つて「恩知らず」の祖國に復讐すべくオフィーディアスに助力を申し出、自らヴォルサイ軍を率ゐてローマに迫る。ローマは狼狽うろたへ、民衆は怯え、俺は「追放に賛成はしたけれど、氣の毒だと言つたのだ」、「俺もさうだ」と口々に云つて醜態を晒す。

だが、結局、祖國を滅ぼさないでと訴へる母の言葉に心を動かされて、コリオレイナスは獨斷で和平を結び、ヴォルサイに戻ると、「裏切り者」の「泣蟲小僧め」とオフィーディアスに嘲罵され、逆上した處を殺されて了ふ。

シェイクスピアはコリオレイナスの傲慢と頑迷と直情をも裁きつつ、民衆の輕佻浮薄と無責任への自らの苦々しい思ひの丈を存分に表現してをり、松原正の云ふ様に、「イギリスに於ては、これほど

徹底的な民主主義罵倒の臺詞がすでに一六〇五年に書かれてゐたといふ事實「こそ「我々日本人にとつては羨むべき」であつて、例へばコリオレイナスの次の臺詞を現代日本に當^{あて}嵌^はめてみるがよい。「これでは、身分、榮譽、分別を以てしても何の決定も出来ない、衆愚が否の應のと文句を附けるからだ——それでは緊急の場合、必要な對策は全く取れず、いたづらに時を空費し、些事に心を奪はれて右往左往するばかりだ。どんな政策にも横槍が入り、一向成果は擧らない」。

「民主主義は、他の全ての政治形態を別にすれば、最悪の政治形態である」と喝破したチャーチルは、民主主義の缺陷を十二分に自覺しつつ民主主義を守つた。また、トックヴィルは平等化の進展を宿命と觀じつつ、一八三五年、輿論といふ「多數の暴政」の危険を剔^{てき}抉^{けつ}する「アメリカの民主政治」を著した。然るに今も大方の日本人は民主主義を何となく奉つてゐるだけで、巷では「衆愚が否の應のと文句を附け」てゐる。(福田恆存譯、新潮社)